

リサイクルデザイン 休刊のご挨拶

1994年の創刊から32年。

Rd（リサイクルデザイン）は、多くの方々に支えられながら歩みを重ねてきました。

歴代の編集人からバトンを受け取り、私とその役目を担ってからも、気づけば15年という歳月が流れました。そして、本号をもちまして、Rdは一区切りを迎えることとなりました。

かつては毎月発行し、10万部を刷った時期もありました。

現在は年4回発行となり、部数も減りました。衰退と言われれば、その側面は否定できないかもしれません。しかし、それだけで語られる媒体ではないと私は思っています。

リサイクルは、特別なものから日常へと変わりました。3Rは広く浸透し、「分別」は当たり前になりました。それは、私たちが目指してきた社会の姿でもあります。

Rdは、自治体ではなく、現場に立つ民間事業者が発信する媒体として生まれました。

創刊以来、歴代編集人と組合員の努力によって生まれ、多くの読者の皆様に支えられながら続いてきました。そこに意味があると信じ、紙面をつくり続けてきました。

本当は、もっと言いたいこともありました。現場の声を、もっと強く届けたかった。

たたまれずに出された段ボールの回収。飲み残しのある缶・びん・ペットボトルの選別。

大雪でも、台風でも、大震災でも、コロナ禍でも、リサイクルを止めなかった現場の責任感。

私たちの仕事は地味かもしれませんが、誇りある仕事です。

もっと皆様と深くつながりたい。「困ったらあの人たちに」と選ばれる存在でありたい。

組合員が成長し、組合が強くなり、横浜全体を支える存在でありたい。

制度やルールという枠組みを超えて、心が通い合う関係を築きたい。

持続可能な循環型社会とは、本来そうした「信頼」の上に成り立つものだと思っています。

制作会議で議論し、悩み、形にする喜び。あの時間は、かけがえのない財産です。

支えてくださった編集スタッフ、発送スタッフ、制作に関わったすべての皆様。

そして読者の皆様、組合員の皆様。感謝の気持ちしかありません。

Rdはここで幕を下ろします。

しかし、横浜市資源リサイクル事業協同組合の活動は続きます。

私たちの志も続きます。

紙は形を変えて、また循環します。私たちもまた、形を変えながら、このまちのリサイクルを支え続けます。終わりではありません。次の段階へ進むための一区切りです。

このまちの循環を、これからも民間の力で支え続けます。

32年間、本当にありがとうございました。

横浜市資源リサイクル事業協同組合

Rd 編集人 藤本 達也

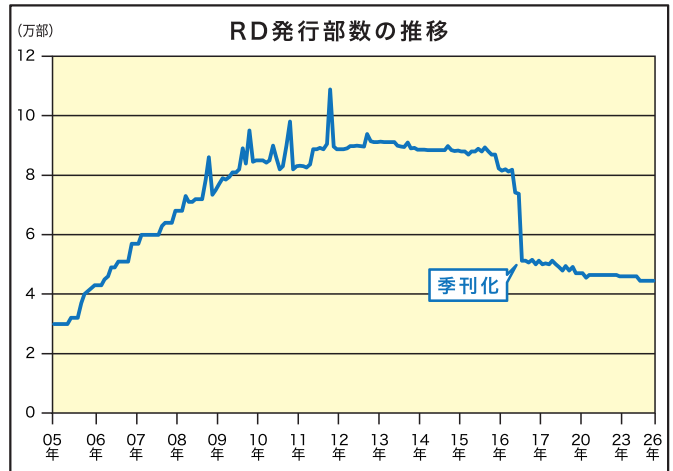
リサイクルデザインと横浜の32年

循環型社会の到来を見据えて リサイクルの大切さを広める

リサイクル組合の広報誌『リサイクルデザイン』は、組合創立から2年後の1994年に創刊しました。創立当初から、循環型社会の到来を見据え、資源リサイクルの考え方や事業者の取り組みを広く社会へ発信し、知識の浸透と拡大を図るには広報誌が不可欠だと考えていました。しかし当時は、雑誌制作の知識がなく、フリーペーパー編集部へスタッフを派遣してノウハウを学ぶところから始めたため、創刊までに2年を要したのです。

1995年に「容器包装リサイクル法」が公布され、社会が本格的に資源リサイクルに取り組む時代を迎えると、組合は普及啓発のため「リサイクルデザインフォーラム」を開催し、市民との対話を通じて理解促進に努めました。2000年には「容器包装リサイクル法」「家電リサイクル法」「食品リサイクル法」が相次いで公布され、横浜市でもペットボトル分別収集を全市で実施。2003年には「横浜G30プラン」が策定され、ごみ減量や資源物の分別とリサイクルに本格的に取り組めます。

2004年にはマスコットキャラクター「りくみちゃん」が登場し、広報活動の幅が拡大。本誌も情報誌として認知が高まり、小中学校や自治会への配布が広がりました。2011年の「ヨコハマ3R夢プラン」策定の翌年には発行



部数が10万部を超えましたが、インターネット普及により紙媒体は転換期を迎えていました。新聞・雑誌の部数減少とともに古紙回収量も減少していきました。2013年にはフォーラムを「環境未来都市・環境絵日記展」に改称し大規模化。一方で本誌は2016年に5万部へ削減し、翌年には月刊から季刊へ移行して内容を精選しました。2022年の「プラスチック資源循環促進法」施行、2024年の「ヨコハマ プラ5.3計画」策定を経て、翌年のプラスチック資源分別収集開始とともに、本誌は創刊300号を迎え、今号の304号が最終号となりました。

年	月	出来事
1992年	10月	リサイクル組合設立
1993年	4月	環境事業推進委員会発足
1994年	11月	環境基本法施行
1995年	9月	「リサイクルデザイン」創刊
1995年	9月	初代編集長に中野聰恭就任
1995年	10月	缶・びんの分別収集市内45%で実施
1995年	4月	「リサイクルデザイン」を広報誌にリニューアル
1995年	6月	容器包装リサイクル法の公布
1996年	10月	誌面で「第1回リサイクルデザインフォーラム」を告知
1996年	1月	読者アンケートを開始
1997年	8月	2代目編集長に宗村隆寛就任
1997年	10月	「横浜市分別収集計画」策定
1997年	1月	粗大ごみ収集有料化
1999年	10月	資源ごみの分別収集を週1回に変更 誌面を4ページから8ページに拡大
1999年	10月	創刊50号
1999年	10月	ペットボトルの分別収集開始
2000年	1月	誌面サイズをB5からA4に変更
2000年	2月	家庭ごみの排出を半透明袋に変更
2001年	4月	「容器包装リサイクル法」完全実施
2001年	4月	「家電リサイクル法」本格施行
2002年	5月	「食品リサイクル法」公布
2002年	3月	ペットボトル分別収集全市実施
2002年	3月	全2色刷で8ページから10ページに拡大
2003年	10月	リサイクル組合創立10周年
2003年	12月	創刊100号
2003年	1月	「横浜G30プラン」策定
2004年	4月	日経平均株価がバブル以降最安値の7603円となる
2004年	11月	別冊「リサイクル今とむかし」発行
2004年	12月	3代目編集長・工藤健一就任
2004年	4月	持ち去り禁止条項の追加
2005年	12月	マスコットキャラクター「りくみちゃん」誌面初登場
2005年	2月	京都市議定書発効
2007年	4月	市内全域で10分別15品目の分別収集開始
2007年	3月	全4色刷で誌面サイズをB5にリニューアル

リサイクルデザインの歴史

バトンをつないだ編集長たち



■ 初代編集長 中野 聰恭 (創刊号～23号)

組合創設当時は広報誌制作のノウハウがなく、手探りで進めてきました。循環型社会という考え方自体の理解も乏しい中で、自分たちの事業の役割を市民に伝えることが必要であり、広報誌の役割は非常に重要でした。日本の「もったいない」文化は3RやSDGsにも通じています。これからも大切な文化的な価値観のひとつとして、子どもたちに継承していただきたいと思います。

■ 二代目編集長 宗村 隆寛 (24号～103号)

当時はリサイクル関連法が相次いで施行され、社会が資源循環へ大きく動いた時期でした。古紙価格の暴落など事業者には厳しい状況もありましたが、横浜市のG30がスタートしたこともあり、組合でフォーラムを開催するなど広報の幅を広げました。日本の資源リサイクルの品質を支えているのは、正確な分別に協力してくださる皆さまのおかげであり、感謝しています。



■ 三代目編集長 工藤 健一 (104号～200号)

これまで多くの方に支えられてきました。取材先の皆さま、読者、そして編集に関わった仲間との出会いは、私にとって大切な宝物です。RDは読者の皆さまとともに育ててきた媒体であり、現場で奮闘する私たちの思いも誌面を通じて届けられたと感じています。資源循環や環境への挑戦はこれからも続きます。読者の皆さまと未来をつくる歩みを、これからも共に進めていきたいと思います。



年	月	主な出来事
2008年	8月	サブプライム問題が日本に波及
2008年	2月	燃やすごみ等の収集回数を週3回から週2回へ変更
2009年	2月	誌面に「りくみちゃんグッズの広告」が登場
2009年	9月	リーマンショックにより古紙相場が下落
2009年	5月	エコカー減税開始
2010年	3月	表紙に「RD」のロゴが登場
2011年	1月	「エコハマ3R夢プラン」を策定
2011年	3月	東日本大震災発生
2011年	4月	創刊200号
2011年	5月	4代目編集長・藤本達也就任
2012年	12月	発行部数10万部を超える
2012年	3月	誌面サイズをA4にリニューアル
2013年	10月	リサイクル組合創立20周年
2013年	10月	「環境未来都市・環境絵日記展」に改称
2013年	10月	「リサイクルデザインフォーラム」を
2014年	3月	資源集団回収による古紙の回収100%実施
2014年	4月	消費税8%に増税
2015年	10月	資源集団回収による古布の回収100%実施
2015年	1月	パリ協定採択
2016年	10月	日銀がマイナス金利導入
2017年	10月	配布方法を変更し、発行部数5万部
2017年	4月	発行サイクルを季刊にリニューアル
2017年	12月	中国が廃プラスチック輸入禁止
2018年	9月	横浜市が「SDGs未来都市」および「自治体SDGsモデル事業」に選定される
2018年	10月	海洋プラスチック問題が国際会議の議題
2019年	9月	「よこはまプラスチック資源循環」を策定
2019年	10月	消費税10%に増税
2020年	4月	新型コロナウイルス感染拡大で緊急事態宣言
2020年	7月	レジ袋の有料化
2022年	4月	プラスチック資源循環促進法施行
2024年	10月	「エコハマプラ5.3(ごみ計画)」を策定
2024年	1月	リサイクル組合創立30周年
2025年	4月	脱炭素投資促進制度が拡充
2025年	4月	プラスチック資源の分別収集が全市で実施
2025年	6月	創刊300号
2025年	12月	分別収集開始 小型充電式電池(リチウムイオン電池等)の

リサイクルデザインが伝えてきたもの

資源リサイクルについて 常に最新情報を伝え続ける

リサイクルデザインは、事業協同組合の機関紙として組合と組合員の活動をお知らせするだけでなく、広報誌として環境や資源リサイクルの情報や知識を広く普及する使命を担ってきました。さらには、組合員であるリサイクル業者と読者である市民の皆さまをつなぐコミュニケーション誌として、交流の場という役割も果たしてきました。横浜市の観光スポット紹介、お店紹介、子育てや料理、健康といった記事も欠かさずに掲載し、地域密着型のローカル誌と生活情報誌としての側面も維持した欲張りな情報誌でした。

読者との意見交換の場としては「サポーターズミーティング」を定期的に開催し、ごみの減量と資源リサイクルにどのように取り組むかを意見交換し、その様子を誌面で伝えてきました。また、環境と資源リサイクルに関する情報については、さまざまな視点と切り口で記事を制作し、多彩な誌面をお届けすることに努めました。例えば、リサイクル事業とは具体的に何をやる仕事なのかを伝えるため、創刊2号にしてアルミ缶のリサイクル現場、3号で横浜市の選別センターを紹介しています。このようなりサイクル現場のレポートのほかに、ごみと資源物の分別方法の解説、出し方のマナー講座、世界規模で議論される環境問題の解説、最新の環境用語の紹介なども定番のテーマとして掲載してきました。これらの話題は時代とともに変化と進化を続けており、最新の内容にアップデートしてもらうために同じテーマであっても繰り返し誌面にすることが重要と考え、読者の皆さまにリアルタイムの問題意識と知識の提供に努めてきました。



サポーターズミーティングの紹介記事(2003年)



ごみと資源物の出し方マナーの記事



リサイクルの現場レポート記事



環境用語解説の記事



ごみと資源物の分別紹介記事

リサイクル組合の役割の変化とこれから

資源循環政策とともに歩む

リサイクル組合と事業者の今後

1990年代の横浜は人口が増加し続け、大量に発生するごみを焼却・埋め立て処分していました。一方で、資源回収の制度化を開始し、町内会・自治会からリサイクル業者が古紙・古布・缶・びんを引き取り、資源化する流れが整いました。リサイクル業者は、資源リサイクルの担い手として認知されるようになりました。

2000年代は、人口増加とごみの量がピークを迎え、ごみの最終処分場のひっ迫が深刻化。2003年に「横浜G30プラン」が導入され、家庭ごみの減量に成功したことで、大量焼却から脱却します。資源集団回収の普及に加えて、市が分別回収したプラスチック製容器包装やペットボトルなどをリサイクル業者に売却して資源化するルートも整備され、資源リサイクルがビジネスとして確立しました。

2010年代になると出生数の減少と高齢化が進み、人口は横ばい状態になります。ごみを減らすことから発生させないことに軸足を移した「ヨコハマ3R夢プラン」がスタート。資源物の分別に力を入れ、ごみの減量が進む一方で、家電、小型電子機器、食品などリサイクルの対象が拡大し、リサイクル業者が多様化。分別と選別精度を向上させた品質管理が重視される時代となりました。

2020年以降になると人口の自然減少が始まりました。横浜市はCO2削減を重要テーマにして、CO2の発生源であるプラごみの減量に注力した「ヨコハマプラ5.3計画」を2024年に開始しました。

横浜市の資源循環政策とともにリサイクル事業者の役割は変わり続けており、行政とともに歩んできたリサイクル組合の役割もまた、新しい時代を迎えています。



創刊5号に掲載された高秀秀信横浜市長の挨拶と6号の古紙分別収集の記事



3R推進キャンペーンでごみの分別を行う林文字横浜市長(2011年)



3R推進キャンペーンのリサイクル組合のブース(2011年)



日本APEC横浜でリサイクル組合がカーボンオフセットに協力。林文字市長と記者会見(2010年)



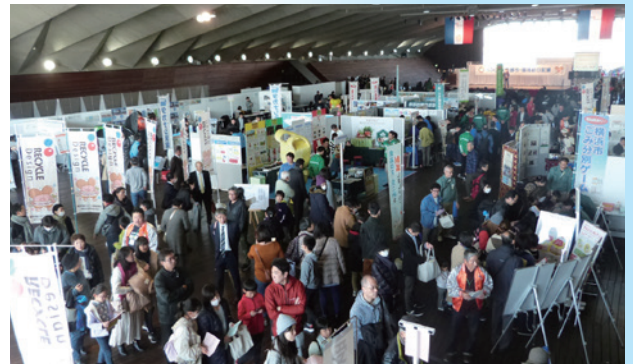
リサイクル組合が第19回グリーン購入大賞を受賞。林文字横浜市長と記念撮影(2018年)

もしもリサイクルデザインがなかったら

横浜市資源循環政策と 事業者と市民の思いをつなぐ

リサイクルデザインは、環境や資源循環、ごみと資源物の分別、資源リサイクルの現場レポートなど、多様な記事を通じて、リサイクル情報の普及と理解の促進に努めてきました。もし、リサイクルデザインがなかったら、横浜市のごみ減量はどこまで成功していたでしょうか。ごみと資源物の分別知識は、どこまで理解され、守られていたでしょうか。制度としての分別は、決まりだから、仕方ないから守るものとなり、その行動の意味や背景にある仕組みへの理解には十分に及ばなかったかもしれません。リサイクルデザインは、資源循環政策の制度と市民の暮らしの間に立ち、リサイクル事業者の現実の姿を伝えることで、この街を支える環境行動の浸透に貢献してきたと自負しています。

横浜市のリサイクルは事業者の努力と読者の皆さまの行動に支えられています。リサイクルデザインはそのつながりの重要性を伝え続けてきたのです。



SDGs未来都市・環境絵日記展(2019年)



町内会の皆さんによる山ノ内見学会(2024年)



町内会の皆さんとの分別講座(2024年)



横浜市立上大岡小学校での出前講師(2026年)

読者の声

横浜市に住むようになり、組合の皆様が資源リサイクルについて市民の理解と参加を求めて情報誌を定期発行されていることに感動したことを覚えています。各企業の社員さんの声やリサイクルの仕組み、現場の様子などの記事は、他で見ることがなくなるとても興味深かったです。(A・Kさん)

自治会の会長として貴誌を通じて会員へゴミの出し方や環境に関する広報を行ってきました。非常に見やすく、回ごとに要点が明確であったため、回覧以外にもトラブル時の事例紹介などに活用させていただきました。(H・Tさん)

Rdは、環境問題や行政ごとに仕組みが異なり分りにくくなりがちなごみ・資源リサイクルの仕組みについて、写真やイラストを用いながら、平易な言葉で分かりやすく伝えてくださる貴重な媒体でした。特に、スマートフォンやパソコンでの情報収集に馴染みの薄い高齢の方々にとって、回覧板を通じて手元に届く紙媒体は、重要な情報源です。(I・Oさん)

ゴミの行方や、正しい分別のやり方を再確認できたり、リサイクル業者さんたちのお仕事内容を知ったりと、「なるほど!」「そうだったんだ」「大変なお仕事だな」毎回、楽しく役立つ情報でした。(S・Mさん)

絵で見て、文字で見て、古い世代は紙の情報がとてもありがたかったです。特にダンボールの出し方などは、畳んできちんと出さなくてはリサイクルできないということをこの冊子で知り、とても役に立ちました。(S・Aさん)

ごみの分別やリサイクル、SDGsなどを、イラストや写真で分かりやすく伝えてくださり、「へえ?!」と学ぶことも多く、時には冷蔵庫に貼って活用するなど暮らしに役立つ存在でした。環境問題は大切と分かっているけど、自ら情報を取りに行くのは簡単ではありません。だからこそ、各家庭に定期的に届けていただけたことに大きな意味があったと感じています。(Y・Kさん)

資源循環のサークルは止まらない

事業協同組合は、零細企業の相互扶助という目的をもって設立されます。しかし、リサイクル組合は、組合員の経済活動の支援ではなく、環境問題の解決に寄与するという社会的要請を事業の中心に据えて設立されました。横浜の街づくりや地域コミュニティの形成、環境教育までを視野に入れ、環境問題のような利益を追求しない自治体や公共団体などによる公益事業の補完活動を取り込んで、活動理念としてきました。

リサイクルデザインという広報誌も組合のリサイクル

情報、リサイクル業界の実情を伝え、実用的でわかりやすい情報誌を目指して創刊し、教育委員会を通じて市内の小中高校のほか、地区センター、図書館、区役所、自治会・町内会などに配布してきました。

今号で『リサイクルデザイン』はひとつの区切りを迎え、広報としての役割を終えることとなります。しかし、横浜の資源循環はこれからも止まることなく続いていきます。わたしたちの活動も終わることなく、よりよい街づくりをめざして今後も歩みを進めていきます。



古紙の回収車両
(株式会社富士紙業)



びんのリサイクル現場
(有限会社マルニ商店)



古紙のリサイクル現場
(株式会社富士紙業)



金属のリサイクル現場
(横浜アルコ株式会社)



古布のリサイクル現場
(ナカノ株式会社)



古紙の選別作業
(リサイクルポート山ノ内)

